

キャリア支援・ジュニア育成委員会合同パネルディスカッション企画

支援を行う立場から考えるキャリア支援～研修から現地での実践へ

大嶋 勇成（小児アレルギー学会理事長/福井大学医学系部門医学領域小児科学）

本村知華子（国立病院機構福岡病院小児科）

医師は、臨床医・研究医・開業医・企業・その他のキャリア等、活躍の場の選択肢が豊富であり、勤務地に関しても、都市に限らず地域での勤務やフリーランス等を選ぶこともできる。どのような研修を受け、その経験をどのように生かして小児アレルギー科医として活躍しているのか。演者にはこれからアレルギーの臨床を学びたい同僚・後輩に対し、「研修先で支援を受けた方法」と、研修後アレルギー診療活性化のために地元で取り組まれている経験や実情、特に「地元病院での実践・支援方法」に取り入れた部分、変えた部分や工夫、後輩への支援について様々な地域・立場から語っていただく。現在進行中のジュニアメンバーの設立とともに、小児アレルギー領域に関心を持つ医療者がキャリアプランを立てる際にこのセッションを役立てていただければ幸いである。また管理職の世代には、リーダーシップ、マネジメントなどの組織活性化につながるスキルを得る契機になればと考える。

CPD-1 静岡県立こども病院から香川大学医学部附属病院へ

西庄佐恵

香川大学医学部小児科学講座

私は2007年から約2年間、静岡こども病院感染免疫アレルギー科でアレルギーの研修を受けた。そのころ医師7年目で大学病院に勤務していたが、まともなアレルギー診療の経験はほぼなく、静岡ではイチというよりはむしろゼロから教えていただいたと思う。2年半の研修終えた後は大学病院に戻り、2010年から小児アレルギー外来を立ちあげた。1人での診療には不安もあったが、香川県小児科医会食物アレルギー対策委員会の先生方や、小児アレルギーエデュケーターの資格を取得してくれた看護師さんなど、一緒に活動する仲間のおかげで、これまでなんとか続けることができている。今回「支援を行う立場から考えるキャリア支援」ということで、研修先での経験、当院でのアレルギー診療や地域での活動について、また十分できているとは言い難いが後輩への支援についてお話ししたい。少しでも皆さんの参考になれば幸いである。

CPD-2 個人のキャリアを高め地域のニーズに応える～国立成育医療研究センターからちば小児科アレルギークリニックへ

千葉剛史

ちば小児科アレルギークリニック

もっとも大事なことは、アレルギーを学ぶ覚悟があり、学ぶ環境が身近にないならば、周りを気にせずその環境に飛び込むことだと考える。

私が研修した成育では、大矢先生を始めとした多くの著名な先生方から直接ご指導いただき、また優秀な同期と切磋琢磨しながら数多くの症例を受け持つことで貴重な経験を積むことができた。また研究面でも環境省主導のエコチル研究のデータ採取、Petit study など様々な研究に携わることができ臨床・研究の両面で専門施設でなければ経験できない充実した研修を送る事ができた。

研修終了後は地元の総合病院に戻り、成育との環境のギャップを痛感したが診療と平行して必要機材の導入、病院スタッフの教育、患者家族へのアレルギー教室の立ち上げなど専門施設としての環境整備を行った。院外活動として、各施設でのエビデン講演会、アレルギー市民公開講座なども行った。

その後、早期介入が必要な患者にスムーズにアプローチできるアレルギーを専門とするクリニックも必要と考え2022年に開業した。現状、小児アレルギーに携わる医療者の数が圧倒的に足りず、育成が必須と痛感している。各県様々な事情があるが、私が経験している現状、課題、キャリア支援などについて言及し、アレルギー診療に興味を抱いている方のキャリア形成の参考になれば幸いである。

CPD-3 相模原病院での研修を経ての長野県でのアレルギー診療

小池由美

長野県立こども病院アレルギー科

国立病院機構相模原病院で卒後7年からの3年間研修した。圧倒的な数の食物経口負荷試験（OFC）、経口免疫療法（OIT）や外来診療をはじめ、研究においては国内外の学会発表や論文作成まで、基礎からすべてを教えていただき貴重な経験をした。

研修後は長野県立こども病院に勤務した。診療においては相模原病院の枠組みそのままに OFC を開始した。開始にあたっては看護師とのアナフィラキシー対策のシミュレーションなどの研修会や栄養科との密な連携が必須であった。マンパワーがないため OIT は施行せず重症例には負荷量を低く設定した OFC により完全除去を回避した。開始から5年で年間400件と負荷試験数が増加し県内各地から症例をご紹介いただくようになった。

また院内の多種職でアレルギーチームを結成し、患者を中心として多種職が関わる外来診療の実践や、一般市民を対象とした研修会を企画し地域での啓蒙活動に取り組んだ。行政との関わりでは地域の小児基幹施設として地域や学校からの講演依頼を受けた。学校側の疑問や不安を直接聞けることで課題が見え、診療でも症例によっては患者と学校のつなぎ役を担うこともあった。

研修先で学んだ診療を地域で活かし、相模原病院の先生方から継続してご指導をいただけることでアレルギー診療を行うことができている。

CPD-4 国立病院機構三重病院で学び、いま北海道で取り組んでいること

野上和剛

札幌医科大学医学部小児科学講座

2019年春から2年間、国立病院機構三重病院臨床研究部・アレルギーセンターへ国内留学し、多くの学びの機会を与えて頂いた。振り返ると、「こういうことをもっと勉強すればよかった」、「こんな失敗をした(中には留学後に気付いて冷や汗がでる)」と思う事に尽きないが、とても充実した日々であった。古巣の札幌医科大学医学部小児科に戻り3年半が経過し、様々な取り組みを進めている。

不出来であった私は三重病院の先生方には到底追いつけないと思う一方で、大学病院勤務のメリットや北海道という地域特性を踏まえ、変化と工夫も交えながら前向きに仕事を行うことができている。アレルギーを専門に志す同門の仲間や学生・初期研修医も急増している。これまで多少の困難はあったが、色々なつながりを広げ、「計画的偶発性」、「Self-leadership」、「視点・視野・視座」、「パーツモデル」といったキーワードを心の武器として課題に取り組み、不出来なりに背伸びをしながら落ち込みながらも、いくつか形にできたものがある。

学会のキャリア支援委員会の一員として、これまでの私の経歴や取組、上記のキーワードの中に、会員の皆様の仕事やキャリア形成・キャリア支援に活かせる部分が少しでもあると、大変嬉しく思う。

CPD-5 あいち小児保健医療総合センターから大阪はびきの医療センターへ

高岡有理

大阪はびきの医療センター小児科

私は2005年から2年間あいち小児保健医療総合センター（あいち小児）アレルギー科で研修し、2008年から大阪はびきの医療センター（はびきの）小児科に就職し現在に至る。あいち小児では主に食物アレルギーと臨床研究について学び、それがアレルギー診療の基盤となった。はびきのでは気管支喘息を中心とする全人的医療、結核治療管理について学ぶのと同時に、あいち小児で得た食物アレルギーの知識を伝え発展させることができている。

私はあいち小児の研修でメンター（助言者）を得ることができた。研修終了後17年の間には仕事や家庭に様々な変化があったが、メンターを始めとして東海から関西まで良き仲間とずっと繋がっていったことは私の財産である。そして今後もアレルギーについて深めていくと同時に、自分の経験を後輩にも伝えたいと考えている。

若手には自分のメンターを見つけることを考えてもらいたいと思う。同時に支援する立場も社会の変化に応じたキャリア支援教育について理解しておく必要があると考える。当学会のキャリア支援によって、若手とベテランが最新のキャリア支援教育について学ぶ機会を得ることができ、お互いが繋がるきっかけとなると良いと考える。

CPD-6 小児アレルギー学会 ジュニアメンバーの設立に向けて

森田英明^{1,2)}

¹⁾国立成育医療研究センター免疫アレルギー・感染研究部、²⁾国立成育医療研究センターアレルギーセンター

日本小児アレルギー学会では、本学会の将来を担う次世代の育成を目的として、ジュニアメンバーの設立を検討しています。ジュニアメンバーの活動内容はまだ検討段階にありますが、若い頃から学術活動に携わる機会や、学会の運営に関わる機会を提供し、将来のアレルギー診療や学術活動に役立てていただきたいと考えています。大学病院などの専門機関に所属していない先生方や、所属施設にアレルギー専門の指導医がいない先生方でも、ジュニアメンバーの活動を通じて、アレルギー診療や学術活動を学ぶ機会を得られる可能性があります。また、ジュニアメンバーの活動を通じて、同じ志を持つ同年代の先生方や、本学会で中心的な役割を担う先生方とつながる機会も得られるかもしれません。本講演では、現段階で検討されているジュニアメンバーの枠組みをご紹介します。